

Title	互助土族語丹麻方言の特徴
Author(s)	角道, 正佳
Citation	大阪外国語大学論集. 31 p.187-p.213
Issue Date	2005-03-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79953
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

互助土族語丹麻方言の特徴

角 道 正 佳

Remarks on the Danma Dialect of Huzhu Monghul Language

KAKUDO Masayoshi

Close examination of *Huzhu Mongghul Folklore Text & Translations* shows the characteristics of the Danma dialect of Huzhu Monghul language. Some of the remarkable aspects are as follows. Syllable final consonants *r* and *l* seldom appear and *i* is usually added. Distinction between consonant stem and vowel stem is ambiguated. Non-high long vowels and diphthongs tend to be raised and *au* completely disappears. Back long vowels tend to be shortened rather than front long vowels and open long vowels tend to be shortened rather than close long vowels. *sh* is inserted before *d* in dative-locative case *-di*, converb *-dila*, commitative case *-di(i)* and deadjective and denominal verbal suffix *-di*, which is partly shared by the Tianzhu dialect of Mongul and Kangjia language. *n* is inserted before *l* in the converb *-sanghulo*, plural *-ghula*, and emphatic adverbial suffix *-ghula*. *m* alternates with *n* in emphatic adverbial suffix *nama*. *l* in causative suffix *-lgha* disappears. Converb *-wa(ni)* is added not only to long vowel stems but also to short vowel stems. The distinction between verbal ending *-ni* and *-ni* which are neutralized in Halqighul, Naringhul and Tianzhu dialects is rigid as in Donggou dialect. *-gui* alternates with *-gi*. *-ja* alternates with *-ji* before *gua*. Second pronoun and third pronoun are partly neutralized into *te*.

キーワード：互助土族語，丹麻方言，新正書法

0. はじめに

土族語互助方言の下位方言に関しては角道（1988）で論じ，特に天祝方言については角道（1997）で論じたが，さらにこれらの方言とは明確に異なった特徴を示す丹麻方言と呼べるような方言が存在することが，Limusishiden & Kevin Stuart（1998）*Huzhu Mongghul Folklore Text & Translations* を検討することで分かった。同書は *Chileb*（祁連山）（漢語名，赤列布，互助土族自治県民族宗教事務局＜赤列布＞編輯組）という雑誌に掲載された土族語のテキストを再録し独自の資料を付け加え，それを英訳し注釈を加えて出版したものである。*Chileb* からの出典は同書の文献リストに著者（執筆者）別に元の綴り字でタイトル

が記されている。この綴り字と同書のタイトルの綴り字を付き合わせると完全に一致するものは3つしかなく、他のものはどこか違っている。一致しないのは Limusishiden が独自の表記体系で表記しているためである。この表記体系は正規の正書法と使用する字母は同じであり音価の与え方も基本的には同じであるため、よく似た表記体系である。丹麻方言の特徴を非常によく表していると思われるので、(丹麻方言式) 新正書法を呼ぶことにする。Limusishiden は互助土族自治県丹麻公社土官生まれの母語話者である。

同書の第二章は婚礼の儀式を詳しく記述したものであり、Limusishiden & Kevin Stuart (1998: 41) の註 34 に Citation from *Chileb* are given exactly as they appear in the original と明記されている。しかし、元のタイトルが Monghulnu Urog Warigu Darsuu 「土族の婚姻の習慣」であるのに対して、同書 p.41 のタイトルが Mongghulni Rog Warigu Darisuu 「土族の婚姻の習慣」であることを考えると、上述の註にはわかには信じがたい。両者には次のような違いがあるからである。

元のタイトル	同書のタイトル	
-nu	-ni	(属格)
Urog	Rog	親戚
Darsuu	Darisuu	習慣

この違いは正規の正書法と新正書法との違いを如実に反映している。属格を表す形式に含まれる母音の違いは両者の規則的な違いである。「親戚」の第一音節が脱落するのは新正書法の特徴であり、「習慣」の r が音節末に現れないで後に i を添加するのも新正書法の特徴である。

タイトルの違いを並べてみると次のようになる。著者名(執筆者名)、同書に記載されているローマ字綴り(拼音字母)、元のテキストのタイトル、同書のタイトル、記載ページ、訳の順に記す。下線を引いた部分が正規の正書法と新正書法が違う部分である。

席元麟 XiYuanlin (Xi²Yuan²lin²)

Yaandu Fugorla Ghajar Fulina	Manzihun
Yandi Hguarila Ghajari Fulina p.144	Manzihun p.173
「どうして牛は土地を耕すのか」	「マンジフン」

董思明 DunSimiin (Dong³Si¹ming²)

Hgainu Hawarnu Yama Gaa Hghuirwa
Hgaini Hawarini Yamaga Hguariwa p.150
「豚の鼻はどうして短いのか」

哈全德 HaCuandii (Ha¹Quan²de³)

Ghuraan Xjunnu Jublong Aadal	Gugu Xau Yama Giji Ireja	Xoofun Beeri
Ghuran Xjunni Jurilang Adal p.190	Gugu Xuu Yamakiji Reja p.151	Xofin Beeri p.188

- 「三人娘の苦しい暮らし」 「カッコウはどうして来たか」 「親孝行の妻」
 伊興連 Yixinlen (Yi'Xing'lian²)
 Njeenaanu rgensa Mauna
 Njinani Rgansa Muuna p.181
 「自分は彼より悪い」 「お爺さんとお婆さんの歌」
 董生華 Dunsinhua (Dong³Sheng'hua¹) 祁生華 QiiSinhua (Qi²Sheng'hua¹)
 Kennu sainduwa Sgildu Diuriguu Gui
 Kenni Saindiwa? p.185 Sgiliđi Diuriguni Gua p.186
 「誰が良いか」 「心に満たされない」
 李延索 LiYansoo (Li³Yan²suo³) 李東俞 LiDunyu (Li³Dong¹yu²)
 Harwan Sasiinu Nemqong Bulai Yama gisada bas arasinu bii qaxji
 Haran-Sasiini-Nenqang-Bulai p.192 Basj Rasinj Bii Qaxji p.197
 「十世代貧しい子供」 「どうしても虎の皮を剥ぐな」
 席恒文 Xihunwun (Xi²Heng²wen²) 王國金 Wangguijin (Wang²Guo²jin¹)
 Kudu Jarighu Baghagu ni Ingori Xuu⁽¹⁾
 Kudu Jarighu Baghaguni p.198 Ingori Xuu p.204
 「家を使う」 「オウム」
 蘇紅秉 Suhunbiin (Su¹Hong²bin³) 李生元 Lii Sinyuan (Li³Sheng¹yuan²)
 Nanjeer Anjighai Xau Da Alog Mughui
 Nanjari p.215 Anjighai Xuu Da Alog Mughui p.220
 「ナンジェール」 「雀と斑の蛇」
 姚生學 YoSinxuu (Yao²Sheng¹xue²)
 Niur Daaldisan Xurghul Ujejin Nuhui Da Muqinnu Namtar
 Niuri Dalidisan Xrighuali Rjejin p.224 Nuhui Da Muuxini Namtari p.234
 「面子を失った古い師」 「犬と猫の話」
 董仁増 DunRinzin (Dong³Ren²zeng¹) 伊全福 YiQuanfu (Yi¹Quan²fu³)
 Ghudalqang Bugharsang Da Lamadee
 Ghudaliqang p.225 Bugharisang Da Lamadij p.226
 「嘘つき」 「ブガルサンとラマ様」
 白生全 Biisincuan (Bai²Sheng¹quan²) 白永福 Biiyunfu (Bai²Yong³fu²)
 Mangghuzi Mangghuzi Aanee
 Mangghuzi p.226 Mangghuzi Aanee p.229
 「マンガス」 「マンガス婆さん」
 李發明 Lifaamiin (Li³Fa¹ming²) 陸建春 LuJanchun (Lu¹Jian¹chun¹)
 Xni Tangdarigii Maa Yaandu Ulija
 Xni Tangdarihiima p.242 Yandi Lija? p.247
 「新しいタンダルギーマ」 「何になったか」

李延海 LuYanhai (Li³Yan²hai³)

Taalghajin Hughui

Huguai p.241

「謎々」

正規の正書法と新正書法とがたまたま一致している場合を除くと、元のタイトルが明らかに新正書法的であるのは李發明の Xni「新しい」だけである。x の直後の i を表記しない綴り方は新正書法と同じである。

註 34 の citation がどういう意味なのか明確でないが、使用語彙という意味ならあるいは事実かもしれない。しかし同書には文法形式の差し替えや語彙の差し替えも頻繁に見られる。この事実は同書 p.31 に述べられている Sunhunbiin (蘇紅秉) (1988: 5-6) の元のテキストからの引用と同書の表記とを付き合わせるとはっきりする。両者を上下に並べて訳を付けると以下ようになる。

Lamadee	Nanjeernu	sundulaa	muroongenu	qireedu	kuriji,
Lamadii	Nanjarini	sndila	muruungini	qiraidi	kurija.

ラマ様は ナンジェールと 並んで乗って 川の 岸に やって来て／た。

ghuilo	lausaresa	bauldaaxja.	hara ulijinu	lamadee	Nanjeerdu	kilegu ni:
Te	ghuaila	losarsa	boxja.	haralijini	lamadii	Nanjaridi
その 二人は	ラバから	降りた。	暗くなって	ラマ様は	ナンジェールに	言った。

“Qi szu qireereji ntiraa, bu turoji ntiraaya” giji

“Qi ne szu qirairaji tira. Bu turaji qaaya” gija.

「あなたは この 水の 岸で 寝なさい。私は 中で 寝ます。」と／と言った。

Lamadee	noor	kuraa	xjaanu	Nanjeer	sgildunaa:	“Bu noor kuraa
Lamadii	noori	kuraxja.		Nanjari	muulaguni.	“Bu noori kura

ラマ様が 眠く なって いって ナンジェールは 心で／思った。「私が 眠く なって

xjigu	ne	lamadee	ndaa	muroondu	sgoldaa	bau	xjilghaguna	gaanu
xjisa		lamadii	nda	muruundi	sgolida	bo	xjighaguna.”	Ga

しまうと この ラマ様は 私を 川に 蹴って 落として しまう。」 と

	imelniinu	awuji	iree		kol	taadanu	geewaa
gan	te	yimeeliniini	awuji	ra	teni	Lamadiini	kol
彼女は	その	鞍を	取って	きて	その	ラマ様の	足の
						近くに	置いて／た。

	nige	rogdunu	noor	kuriji	guiwaa	sonosaa	saujiiguna.
Te	jinani	nige	rogshdini	noori	kuriji	guiwa	sunisa
彼女は	自分の	一つの	方向を	眠く	なら	ずに	聞いて
							いた。

Lamadee nige noor saraa maimaidu nige sgoldda kilegu ni:
 Lamadii sara gan maimaidi hgualida kileguni,
 ラマ様は ちょっと 眠りから 醒めて 彼は 荒々しく ちょっと 蹴って 言った。
 “Haha sain huxidii, muroonre bauxjiwang” gisa
 “Ha, ha sain huxidii! Muruunra bo xjiwa,” gija.
 「ハハ、口の達者な奴め、川に 落ちていった。」と言うと／言った。
 Nanjeer kilegu ni: “Haha, puxa puxa, muroonre bau xjisannu imelwa”
 Nanjari kileguni, “Ha, ha puxa, puxa, muruunra bo xjisanni yimeeliwa.”
 ナンジェールは 言った。「ハハ、違う 違う、川に 落ちて いったのは 鞍です。」
 Lamadee Nanjaarnu muroondu baulgha shdaji gua.
 Lamadiii Nanjarini muruundi bogha shdaji gua.
 ラマ様は ナンジェールを 川に 落とすことは でき なかった。

このテキストを正書法と付き合わせると、完全に一致するのは、語幹では awu-「取る」, bu「私」, gi-「という」, gua「(否定+客観範疇)」, gui-「ない(動詞語幹)」, huxi「口」, kol「足」, kuri-「やって来る」, nige「ある、一」, qi「あなた」, rog「方向」, sain「良い」, shda-「できる」接尾辞では、-dii「～を持った」, -guna「(形動詞未来+客観範疇)」, -ji「(方向)」, -ji「(結合副動詞)」, sa「(奪格)」, -san「(形動詞過去)」, -wa「(客観範疇)」, -xja「～てしまった」, -ya「(意志)」だけである。

違う語には次のものがある。まず母音の長短の違いとして丹麻方言で短母音の語に次の語がある。()は正規の正書法の表記である。nda (ndaa)「私を」, tada (taada)「近い」, tira- (ntiraa-)「寝る」, -a (-aa)「(分離副動詞)」, -wa (-waa)「(分離副動詞)」。正書法の au が o になっている語が losa (lausa)「ラバ」, bo- (bau-)「降りる」, so- (sau-)「～ている」。この逆に、丹麻方言で長母音、元のテキストで短母音のものが yimeeli (imel)「鞍」である。

長母音の音価が違う語に Lamadii (Lamadee)「ラマ様」, gii- (gee-)「置く」, muruun (muroon)「河」がある。これは丹麻方言の長母音が上昇する方向へ変化しているためである。類似した語に qirai (qiree)「岸」がある。この変化は主として r の直後でのみ起こる。長短のみならず音価が違う語に Nanjari (Nanjeer)「(人名)」がある。

短母音の音価が違う語には次の語がある。ただしこれは音価の違いだけではなく、音素解釈の違いでもある。その中で最も多く見られるのが i と u の違いであり、属格、対格、与位格を表す形式に規則的に現れる。maimaidi (maimaidu)「荒々しく」, -ni (-nu, ni)「(主題)」, -ni (-nu)「(属格、対格)」, -di (-du)「(与位格)」, -niini (-niinu)「(対格+主題)」。i と e の違いが -gi (-ge)「(単数)」に見られ規則的に現れる。位格は単独では -ra (あるいは -ri) の形式で現れるが、後に何か接続すると、随意的に -r の形式になる。-ra (-re) (位格)」, -raji (-reji)「(位格+方向)」, -rsa (-resa)「(位格+奪格)」。

丹麻方言では語末の母音が広い変種に変化しているため, ghuailla (ghuilo)「二人とも」,

tura (turo)「中」のように正書法の o に対して a で表記されている語がある。ra- (ire-)「来る」も同じ現象である。また丹麻方言では円唇母音の上昇二重母音化が頻繁に記されているため hgualida- (sgolda-)「蹴る」のように ua で表記されている語がある。第一音節の母音が表記されていない語に sndila- (sundula-)「並んで乗る」がある。これは語頭の s, x の直後の i, u を丹波方言が保存していない（無声化している）ためである。以上の他に個別的なものとして sunis- (sonosi-, sunosi-)「聞く」がある。

以上述べたのは母音についてであるが、子音については次のような特徴がある。丹麻方言ではごく少数の語を除いて r と l は音節末には生じず後に必ず i が添加している。Nanjari (Nanjeer)「(人名)」, noori (noor)「眠り」, hgualida- (sgolda-)「蹴って」, yimeeli (imel)「鞍」, -lid (a) (-lda)「(相互共同形)」, 使役形接辞の場合は -ligha- もあるが、多くは i が添加しないで -gha (-lgha)「(使役)」のように l が完全に脱落する。与位格の形式に -shdi (-du)「(与位格)」のように sh が添加していることがある。丹波方言で sh が添加するのは語幹末が ri, g のときである。以上の他に個別的な例として h と s が対応する hgualida- (sgolda-)「蹴る」がある。語頭子音連続のあり方が違う例として tira- (ntiraa-)「寝る」がある。

正規の正書法でも分かち書きにはバリエーションがある⁽²⁾が、以下のような違いが見られる。haralijini (hara ulijinu)「暗くなって」, kileguni (kilegu ni)「(次のように)言った」, ha, ha (haha)「ハハ」。

Limusishiden は元のテキストにある形式を省略したり、元のテキストにない語を付け足したり、別の語彙を使用したりして改竄している点が多数見られる。tira- (ntiraa-)「寝る」という語彙があるにもかかわらず 1 語は qaa- (nqaa-)「寝る」に置き換えている。また語彙を置き換え文法形式を変えたもの muulaguni (sgildunaa)「思った／心で」がある。文が終了していないのに文を終了させたものに, gija (giji)「と言った／と言って」, giixja (geewaa)「置いた／置いて」, kuraaxja (kuraa)「なってしまった／なって」がある。同じ形式のバリエーションであるが違うものに置き換えたものに ga (gaanu)「と言って」がある。また意味的にはほとんど同じであるが、文法形式を置き換えたものに xjisa (xjigu)「なると(仮定副動詞)／なると」がある⁽³⁾。

Chileb に出典がないものは Loya, Zhunmaa という非識字者の語ったものを Limusishiden が表記したものである。もう一人の提供者 Niidosirang は Limusishiden の弟であり非識字者ではないが彼が漢語で書いたものを Limusishiden が土族語丹麻方言で表記したものである。したがって同書は基本的に土族語互助方言の下位方言である丹麻方言を表記したものであると考えてよいであろう。同書に現れるすべての語及び変化形をバリエーションと共に取り出し、正規の正書法と付き合わせることによって丹麻方言の特徴を明らかにするのが本稿の目的である。

1. 丹波方言の音素目録

1. 1. 母音音素目録

丹麻方言の母音には短母音 i, e, a, o, u, 長母音 ii, ee, aa, oo, uu, 二重母音 ai, ui, iu, ua, 三重母音 uai がある。正規の正書法には見られるが丹麻方言には見られない母音は au, ia, iau である。ia, iau は出現頻度が低いので、たまたま該当する語がないのかもしれない。正規の正書法で ia は ng の直前にしか現れないが liang 「梁」は丹麻方言では leng である。正規の正書法の au は非常に多く現れる母音であるが、丹麻方言ではまったく現れず、uu または o に対応する。正規の正書法では iu は d, l, n の直後にしか現れないが、丹麻方言ではそれ以外に y, j, q, t の直後にも現れる。しかし x の直後には現れない。

1. 2. 子音音素目録

子音音素は正規の正書法と同じで, l, r, b, d, g gh, p, t, k, f, s, sh, x, h, c, z, q, j, ch, zh がある。

2. 音節構造

音素目録は似ていても音節構造は正規の正書法とは大きく異なっている。特に音節末に現れる子音には限りがある。また初頭子音が s, x, sh のもので第一母音が狭い場合、表記されないことがある。その結果 sngi (singi) 「獅子」のように語頭で三つ子音が連続することがあるし, xn (xin) 「手紙」のように母音を持っていない語が存在する。

2. 1. 語頭子音連続

語頭子音連続には次のものがある。# は語頭を表す。

	p	b	m	t	d	n	l	c	z	r	q	j	ch	k	g	gh
#m	○															
#n	○				○							○			○	
#ng																
#s		○	○		○	○	○		○						○	○
#x			○			○	○		○	○		○			○	○
#sh		○			○	○			○						○	○
#r		○	○		○		○		○			○			○	○
#h															○	○

語頭三子音連続は第一子音が s, x, sh で第二子音が n のものに現れる。実際に確認できたのは snb, snd, snq, snj, sng, xnk, xng, shng である。正規の正書法では第一子音の後に i または u が書かれる語である。丹麻方言ではこれら無声化している母音を書かない。

第一子音を鼻音とする語頭子音連続の第一子音が脱落している語がある。実際に得られた組み合わせは以下の通りである。正規の正書法ではすべて語頭に鼻音が表記されている。第一子音の鼻音の有無によるバリエーションは他の方言にも見られる⁽⁴⁾が、丹麻方言の新正書法ではバリエーションは稀にしか存在しない。「ここ」, 「安定する」, 「自分」だけ

である。

	鼻音 + 子音	子音
mp	mpiila-「発展する」	
np	npeela-「発展する」	
nt		tira-「寝る」
nd	nda「私を／に」, ndirii「ここ」 ndangla-「安定する」	dige「卵」, dasi-「喉が渴く」, dirii「ここ」 dangla-「安定する」
nq		qorila-「供える」
nj	njeen「自分」	jasi「鉄」, jila-「する」, jina「自分」
nzh	nzhisaninzhang「kilyn horn」	zhiwa「客」
ng		ghai-「開ける」, ghua-「洗う」, ghuasi「羊毛」
mp	nguli「フクロウ」	gurai-「燃える」, gurihga「鳩」, guru-「転がる」

音節構造の型には影響しないが、丹麻方言には語頭の短母音 i, u を避ける傾向があり、i の場合は語頭に y が添加するのが普通であり、i が残るのは 1 例しか見当たらない。また正規の正書法と比べると、語頭で長母音 yii に対応する語がある。u の場合は一部の語についてはそのままであるが、語頭に w が添加するか、完全に脱落する。いつどのケースになるかは音韻的には規定できない。短母音 a で始まる語は存在するが、短母音 e, o で始まる語は存在しない。

i で始まる語は ingori 204「オウム」1 語しかない。語頭に y が付いている語は yida- 37, yiida- 191 (idaa-)「疲れる」, yidi- 103 (idi-, udi-)「痛める」, yigha 75 (igha)「枕」, yikang 120 (ikang)「オンドル」, yimaa 171 (imaa)「山羊」, yixi 149, yiixi 238 (ixi)「非常に」の 5 語、語頭に y が付いていて母音が長母音の語が yiidang 197(idang)「きっと、必ず」, yiigua 54 (igua)「全部、皆」, yiijee 71 (ijee)「イジェー」, yiile 91 (ilee)「鬼」, yiili 46, yiila 182 (ili)「皆」, yiisge 45, yiighi 43 (isge)「すぐ、さっき」, yiixi 238 (~ yixi 149) (ixi)「非常に」の 7 語ある。

u で始まる語は ude 51 (~ rde 36) (ude)「門」, ugo 43 (ugo)「語」, ula 46 (~ la 33) (ula)「山」, ulaa- 57 (ulaa-)「泣く」の 4 語、語頭に w が付いている語は, wulog 81 (ulog)「肚帯」, wudi- 175 (~ yidi- 103) (udi-, idi-)「痛む」, wudog 132 (udig, idag)「膝」, wulidi 172 (uldi)「刀」, wuli- 120 (~ li- 41) (uli-)「なる」, wunee 94 (unee)「乳牛」, wuqi- 35 (uqi-)「飲む」, wurigan 144 (urgon)「広い」, wuri- 89 (uri-)「招く」, wurii 35 (urii)「遅い」, wurii 7 (urii)「夜」, wuruu 163 (uroo)「死体」, wusi 36 (usi, wesi, yesi)「草」の 13 語、語頭の u が脱落している語は, daa- 159 (udaa-)「遅れる」, ghua- 45, ghu- 36 (ughu-)「与える」, la 33 (~ ula 46) (ula)「山」, li- 41 (~ wuli- 120) (uli-)「なる」, luan 33 (ulon)「多い」, lang 43 (ulong)「雲」, rua- 53, ru- 49 (uro-)「入る」, rog 41 (urog)「親戚」, ruan 87 (uron)「床、席、場所」, ruasi- 116 (urosi-)「流れる」の 10 語ある。

類似した環境で語頭の母音が r になっている語が, rde 36 (~ ude 51) (ude)「門」, rde- 33 (ide-)「食べる」, rje- 36 (uje-)「見る」の 3 語ある。この現象は天祝方言にも見られる。また「門」と「食べる」に関しては紅崖子溝方言も類似した現象を示している⁽⁵⁾。

2. 2. 音節末子音

丹麻方言で語末に現れる子音は m, n, ng, s, r, l, b, g であるが, g, n, ng 以外は少数の例しか確認できない。その語を以下にすべて述べる。

r で終わる語は bughuur 155 「プレスレット」, diidiur 196, diidiuri 7 (diidiur, doodoor) 「ポケット」, ger 48 (ger) 「家」, huimaar 134 (huimor) 「オンドルの下の平らな所」, hujir 94 (hujir) 「羊毛を巻きつける棒」の 5 語, 語中の音節末に r が現れる語は purghan 64 (purghaan) 「仏」 1 語のみである。l で終わる語は adal 103 (aadal) 「生活」, deel 36 (deel) 「服」, ghal 90 (ghal) 「火」, kol 31 (kol) 「足」, mongghul 28 (mongghul) 「土族」, suul 81 (suul) 「尻尾」の 6 語, b で終わる語は Chileb 64 (chileb) 「祁連山」, jub 187 (jub, jor) 「正しい」の 2 語, s で終わる語は lus 45 (lus) 「国」の 1 語, m で終わる語は nem 198 (nem) 「値段」, qim 45 (qim) 「法律」の 2 語しかない。

b, s, m で終わる語は元々多くない上に正規の正書法で m で終わる語の一部は rguan 56 (rgoom) 「必要である」, hurin 45 (hurim) 「宴」, lon 150 (lom) 「経典」, tuluun 186 (tulum) 「袋」のように n に変化している。

語中における音節末子音のあり方を記す意味で語中における二子音連続の型を以下に示す。縦軸が第一子音, 横軸が第二子音であり, 一番右の列は語末を表す。

	p	b	m	t	d	n	l	c	z	s	r	q	j	x	ch	zh	sh	k	g	gh	h	#
m					○																	○
n	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ng	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
s																			○			○
sh					○																	
r																				○		○
l																						○
b					○																	○
g					○		○			○	○	○	○	○								○

nogxjili (nogxjil) 「雷」のように語中で子音が三つ続くことがある。

2. 3. 子音語幹／母音語幹

正規の正書法で r, l で終わる語は多数存在するが, 丹麻方言では後に i が添加しているために実際に r, l で終わる語は数例ずつしか見当たらない。しかしこれらの語は安定して同じ表記で現れるので誤植ではない。正規の正書法で ri, li で終わる語も当然ある。それらの語は丹麻方言の新正書法でも ri, li で終わることになるので本来の子音語幹か母音語幹かはあいまいになる。実態は次のようである。

正書法	新正書法	
	r	ri
r	6	多数
ri	—	11

正書法	新正書法	
	l	li
l	6	多数
li	—	4

丹麻方言で ri, li で終わるからと言って母音語幹と認識されているかというとは必ずしもそうではない。ある語が母音語幹か子音語幹かを確かめる方法の一つは単数を表す接辞-*ngi* (あるいは-*nga*) ~-*gi* (あるいは-*ga*) のどちらの異形態が付いているかである。母音語幹には-*ngi* (あるいは-*nga*)、子音語幹には-*gi* (あるいは-*ga*) が付くのが普通である。実際は次のようになっている。r で終わる語は子音語幹, ri で終わる語は子音語幹のときもあれば母音語幹のときもあり自由交替しているか、子音語幹である。l, li で終わる語は子音語幹である。g で終わる語はすべて子音語幹であるが, qijiu (qijig) 「花」という本来は語末に g を有していた語は母音語幹である。kun (kun) 「人」には-*gi* も-*ngi* も付いているが, -*ngi* が付くのは珍しい形式である⁽⁶⁾。

丹麻方言では子音語幹と母音語幹の区別が他の方言とは少し異なっている場合がある。複数接辞-gu(n)la は通常子音語幹に付き, -*nghu*(n)la は母音語幹に付くが, 母音語幹に-gu(n)la が付いた語が存在する。

正書法	新正書法		
	C-gi	Ci-gi (Ci-ga)	Ci-ngi (Ci-nga) V-ngi (V-nga)
r-ge	ger-gi 196 「家」	lamari-gi 75 「燈明」 moori-gi 103 「道」 seeri-gi 106 「お金」 szari-gi 162 「麓」	lamari-ngi 127 「燈明」 moori-ngi 162 「道」 seeri-ngi 110 「お金」 szari-ngi 142 「麓」
		batiri-gi 174 「英雄」 duri-gi 145, duri-ga 169 「日」 ghajari-gi 148 「土地」 ghari-gi 220 「手」 hguari-gi 148 「牛」 nantari-gi 150 「故事」 nari-gi 175 「病氣」 noori-gi 107 「眠り」 niguuduri-gi 212 「ある日」 nukuari-gi 246 「友達」 taari-gi 147 「石」 xmeri-gi 87 「酥油花」	
l-ge	deel-gi 240 「服」 ghal-gi 92 「火」	ghuali-gi 158 「谷」 ghurili-gi 46 「小麦」 noxjili-gi 195 「雷」 sgkali-gi 172 「髭」 sgili-gi 47 「心」 shdanchili-gi 53 「吉祥」 xriguali-gi 191 「占い」	
sh-ge			taashi-ngi 147 「石」

正書法	新正書法		
	C-gi	Ci-gi (Ci-ga)	Ci-ngi (Ci-nga) V-ngi (V-nga)
g-ge		bawog-gi 227 「蛙」 dundog-gi 172 「事」 jantog-gi 152 「半分の物」 kadog-gi 106 「ハダク」 log-gi 223 「恰好」 ralog-gi 75 「枝」	qijiu-ngi 200 「花」
ng-ge		qinsang-gi 107 家庭」 tang-gi 172 「平原」 yuudang-gi 142 「洞穴」	
n-ge		dalan-gi 132 「七十」 fan-gi 192 「年」 fulaan-gi 192 「赤い」 ganchan-gi 94 「麵棒」 jiran-gi 136 「六十」 kun-gi 70 「人」 lamanqan-ga 164 「美しい」 purgaan-gi 169 「仏」 qighaan-ga 225 「白い」 xrin-gi 158 「きれいな」 xjun-ga 229 「娘」	kun-ngi 233 「人」

子音語幹に-ghu(n)nla が付いている例

aaridog-ghunla 129 (aardaggula)「娘」, aayang-ghunla 106 (ayanggula)「母の兄弟」,
kuxin-ghula 46 (kuxingula)「近隣の人」

母音語幹に-ghu(n)nla が付いている例

zhiwa-ghunla 46 (nzhuwangula)「客」, aadee-ghu(n)la 43, 43 (aadeengula)「お爺さん」,
funi-ghunla 43 (funingula)「家族」, shdugu-ghunla 152 (shdoogungula)「老人」

母音語幹に-nghu(n)nla が付いている例

buda-nghu(n)la 33, 44 (budangula)「我々」, ta-nghunla 43 (tangula)「あなた」,
bulai-nghunla 222 (bulaingula)「子供」, aagu-nghunla 51 (aagungula)「おば, 娘」,
te-nghunla 38 (tengula)「彼」

2. 4. 音節初頭形式 iu / uu

iu という母音は正規の正書法では d, l, n の直後にのみ現れる母音であるが、丹麻方言ではこれ以外に y, j, q, t の直後にも現れる。しかしどういうわけか j, q と同じ調音点の x の直後には全く現れない。以下の表で左端と上にある表記は丹麻方言の表記を表し、各欄の中にある表記は正規の正書法の表記を表す。数字は異なり語数を表す。

		iu			uu		
y	第一音節	○ au, oo, uu		8	○ ?		2
	第二音節	○ ?		1	—		
j	第一音節	○ au, oo,		11	○ oo		2
	第二音節	○ oo, uu,	ig	5	—		
q	第一音節	—			○ oo		1
	第二音節	○ ?		1	○ ?		2
x	第一音節	—			○ au, uu		5
	第二音節	—			○ au, uu, iu		1
l	第一音節	○ au, uu, iu		7	○ uu		1
	第二音節	○ iu	og	6	○ iu, i, o, u		8
d	第一音節	○ oo, iu		5	○ au, og		3
	第二音節	○	i	1	—		
t	第一音節	○ au, uu		2	○ oo, uu		6
	第二音節	—			○ uu Ch.[ou] i		4
n	第一音節	○ iu		5	○ oo		1
	第二音節	○ iu		1			

2. 5. 音節末形式

g で終わる音節に先行する母音あるいは g 自体に正規の正書法と丹麻方言の新正書法で大きな違いがある。正規の正書法の ag は丹麻方言ではほとんど og に対応し一部が o, a に対応する。正規の正書法の og は丹麻方言でもほとんど og に対応するが、一部 o, uu に対応するものがある。正規の正書法の ig, eg の g は丹麻方言では保存されていない。ig は iu, i, uu, og のいずれかに対応し、eg は eo に対応する。正規の正書法にも丹麻方言にも ug は存在しない。結局、丹麻方言では後舌母音に後続する g の中には保存されているものと保存されていないものがあるが、前舌母音に後続する音節末の g はすべて保存されていない。以下、g が保存されていない場合だけをすべて述べる。

語末の例としては、rado 130 (aradag) 「獣」、duu 92 (dog) 「毒」、nguli 241 (nguli, ngulig) 「フクロウ」、pujiu 198 (pujig) 「文字」、qjiu 37 (qjig) 「花」、qiruu 79 (qirig) 「兵士」、teo 149 (teg) 「棒」がある。

語中では qora- 79 (qagraa-) 「叫ぶ」、qola- 110 (qagla-) 「形成する」、dola- 148 (dogla-) 「摘む」、rzola- 133 (rzogla-) 「ひっくり返る」、shdola- 177 (shdogla-) 「保護し育てる」のように r, l の直前で後舌母音の後の g が脱落している語が見られる。

正書法	新正書法	
	g を保存している場合	g を保存していない場合
ag	og	o, a
og	og	o, uu
ig	—	iu, i, uu
eg	—	eo

正規の正書法にも ngulig, nguli「フクロウ」のようなバリエーションがあることは注目に値する。丹麻方言の中にも g の有無が共存している語がある。mungulog 220 ~ moluu 141, moliu 147 (moglog, mungulog)「丸い」, xantog 140 ~ xanta 131「袈裟」, nogxji- 195 ~ nox- 149 (nogxji-)「過ぎる」, nogxjili 201 ~ noxjili 195 (nogxjil)「雷」。天祝方言にも同様の現象がある。角道 (1997:49) を参照のこと。

丹麻方言には本来 g がない語に g が添加することがあるという特異な現象がある。この現象は正規の正書法で au の場合に限って起こり、次の例がある。yiu- 151 ~ yog- 154(yau-)「行く」, no- 104 ~ nog- 62 (nau-)「見る」, duu 238 ~ dog 49 (dau)「歌、音」。ただし「歌う」という動詞は常に dula- 49 (daula-)「歌う」という g を持たない形で現れる。

ng で終わる音節の直前に現れる母音には次のような違いがある。正規の正書法の ong に対応する形式はほとんどが ang か uang であり, ong, ung は少数である。aung と uang の違いは上昇二重母音化の違いである。

正書法	新正書法
ang	ang
ong	ang, uang, ong, ung
iang	eng

2. 6. 音節境界

一般的に音節の切れ目がどこにあるかを考える際にまず必要なことは、語頭及び、語末でどのような子音連続が許容されるかということである。ある言語に VC_1C_2V という連続がある場合、音節の切れ方は (1) $V-C_1C_2V$, (2) VC_1-C_2V , (3) VC_1C_2-V の 3 通りが考えられる。そしてこの言語の可能な語頭子音連続の中に # C_1C_2 がある場合には、(1) の切り方もありうるが、そうでない場合は、(2) または (3) の切れ方しかありえない。もしこの言語の可能な語末子音連続の中に C_1C_2 # があれば、(3) の可能性はあるが、そうでない場合は (2) の可能性しか残らない。しかしこの言語でもし語末に C_1 # が来ない場合は音節はどのように切れるのであろうか。

nogxjili (nogxjil)「雷」という語中で子音が 3 つ続く語がある。この ogxji の部分について考えてみると、土族語丹麻方言では語頭で #gx という子音連続は許されないし、語末で xj# のような子音連続はありえないが、語頭の #xj という子音連続は可能であるし、語末の g# は許容されるので、og-xji と切れることになる。しかし natanrsa「沼 (位格+奪格)」という語の anrsa は、この基準では a-nrsa, an-rsa, anr-sa, anrs-a の内のどの切り方も不可能になる。natanrsa は natan&r&sa と形態素に切れるのでこの切り方が参考にはなる。r&sa (& は形態素境界) は ra&sa (あるいは ri&sa) のバリエーションだと考えられるので、この切り方は全く根拠がないわけではない。しかし r が単独で音節を形成するという説明が必要になる。同じ問題は xn (xin)「手紙」でも生じる。この語は単音節語であるから、音節の切れ目がどこにあるかを考える必要はないが、母音を全く含んでない語があることを認めなければならなくなる。ソノリティー (sonority) が大きい方が音節主音であると言えるなら

ば, xn は n が音節主音になる。sngi (singi)「獅子」は単音節語ではなく, sn-gi という二音節語であることになる。語頭子音連続を有する語にはすべてこういった問題が含まれている。

3. 長母音

土族語は母音の長さに区別のある言語であり, 丹麻方言でもその点は同じである。しかし東溝方言の長母音を持つ語が丹麻方言でも長母音を持っている語がある一方で短母音になっている語が多数ある。この逆もわずかながら存在する。aa に限定すると, 長母音を保存している語と短母音化した語の割合は約 1 対 4 である。第一音節とそれ以外, 開音節と閉音節に分けてその実数を東溝方言の a が丹麻方言で aa に対応している語も合わせて表にすると次のようになる。第二音節以下のほうが短母音化がいつそう進んでいる。

正書法	位 置		新正書法	
			aa	a
aa	第一音節	開音節	19	53(+4)
		閉音節	1	7
	第二音節以下	開音節	10	78(+3)
		閉音節	2	8
a	第一音節	開音節	5	
		閉音節	1	
	第二音節以下	開音節	6	
		閉音節	1	

() は長短の自由交替がある語を別々に数えた場合の数字を表す。

4. 長母音／二重母音の上昇化

土族語互助方言の下位方言を分類する上で非常に重要な特徴の一つは, 長母音, 二重母音の合流の仕方である。正規の正書法の ii, ai, ee, uu, oo, au に対応する母音がどのようになっているかを検討すると, その方言の特徴が明確になる。正規の正書法の綴り字を参考にするのは, 互助方言の中で比較的保守的な姿を留めているからである。下位方言の中には一方では, ii 類と ai 類が合流し, uu 類と au 類が合流した紅崖子溝方言のような方言があり, 一方では ai 類と ee 類が合流し, uu 類と au 類が合流している哈拉直溝方言のような方言がある⁽⁷⁾。紅崖子溝方言は長母音と二重母音が上昇する方向に変化した方言であるが丹麻方言も類似した傾向がある。前舌母音に関して言うと, 正規の正書法の ii のみならず ai, ee も丹麻方言の ii に対応する語がかなり存在する。正規の正書法の ai で丹麻方言の ai に対応するものや正規の正書法の ee で丹麻方言の ee に対応するものはむしろ少数である。後舌母音に関しては正規の正書法の uu のみならず au, oo で丹麻方言の uu に対応する語が多数存在し, 正規の正書法の oo が丹麻方言の oo や o に対応する語は少数である。正規の正書法の au が丹麻方言の o に対応するものが多数あるが, oo に対応するものは 1 例もな

い。そもそも丹麻方言で oo が出現するのは非常に限られている。また丹麻方言には au は存在しない。以上の現象を大まかに述べると、丹麻方言では長母音、二重母音が上昇していることになる。どの語彙が上昇するかは方言差がある。以上の関係を表にまとめると次のようになる。各欄の点線より上は第一音節、点線より下はそれ以外を表す。

この表から一目瞭然であるが、oo, o は第一音節にしか現れない。正規の正書法の ee が丹麻方言で ai に対応するのは、第二音節に集中していてほとんどの場合 r の直後の位置である。

丹麻方言では長母音を東溝方言ほど保存していないが、短母音化の傾向は前舌母音よりも後舌母音に多く、狭い母音よりも広い母音に多く見られる。この傾向は、aa と ii に比較的高母音を多く保存している天祝方言とは微妙に異なる⁽⁸⁾。

正書法	新正書法									
	ii		i		ai		ee		e	
ii	44	9 35	9	1 8	1	1	—	—	—	—
ai	13	10 3	—	—	8	8	—	—	—	—
ee	24	13 11	1	1	12	2	26	13	2	—

正書法	新正書法							
	uu		u		oo		o	
uu	21	15 6	11	9 2	—	—	—	—
au	14	13 1	—	—	—	—	20	20
oo	43	25 18	22	13 9	8	8	6	6

5. 上昇二重母音

正規の正書法でも新正書法でも ie という上昇二重母音は現れない。しかし正規の正書法にも新正書法にも ua という上昇二重母音が現れる。ただし、次のような違いがある。正規の正書法では rguaa 「背負う (分離副動詞)」が rguaa でなく rgua と綴られることから分かるように ua は本来 [ua:] という後半が長母音である。また uo は k, g, gh, h, x, zh の直後にしか現れない。一方新正書法では ua の後半は長母音とは限らず、先行する子音も唇音以外のすべての子音が現れうる。ただし d, sh に ua が後続する例はたまたま見当たらなかった。さらに正規の正書法では ua の後に音節末の鼻音が続くことはないが、新正書法では ua の後に音節末の鼻音が続いている例がかなり見られる。つまり、新正書法の ua は主に先行する子音の影響のみならず、後続する同一音節にある鼻音の影響で現れる二重母音である。正規の正書法の ua は新正書法で必ず ua に対応するが、それを除くと新正書法の ua は正規の正書法の o に対応する。

新正書法では前舌短母音の二重母音化は綴り字には表記されないのに、後舌短母音の二重母音化は表記される。これは音声をどれだけ精密に表記するかの問題であり、音素解釈の問題とも関連する。席元麟 (1985) では逆に前舌母音の二重母音だけが表記され、後舌母音の二重母音化は表記されない。正規の正書法ではどちらも表記されない。この違いが方言差を表しているわけではない。新正書法の方針に従うなら、いつ ua になり、いつ o になるかを個別的に語彙的に指定しなければならない。

6. 三重母音

確認できる三重母音は uai のみであり, k, g, gh の直後にのみ現れる。正規の正書法でも uai は現れるが guai-「走る」及びその派生語に限られている。1 例だけ rguai 127 (ngoyi)「他の」という例がある以外は, 新正書法では正規の正書法の ui に対応する位置に uai が出現する。正規の正書法で ui に対応する語で新正書法で uai または ui の例を以下に述べる。第二音節の場合はすべて ui に対応する。

	uai	ui
k	xnkuai 166「庭の狭い地面」	kui 177「悲哀」 kuiden 75「寒い」 kuigi- 241「義理を欠いた待遇をする」 kuija- 45「足りる」
g	hguai 35「非常に」 hguai 241「故事」	gui- 31「ない」 guili- 132「死亡する」 guiqan 103「珍しい」 guiya 58「様」
gh	hghuai 107「非常に」 ghuaila 31「二人とも」 Ghuaisang 60「チベット」	ghuirila- 180「要求する」 mughui 145「蛇」(第二音節) sulighui 78「左」(第二音節) tulighui 33「頭」(第二音節)

7. 子音

子音音素目録は正規の正書法と変わりはないが, 正規の正書法にはない sh, n の添加, n ~ m 交替, l 脱落, g 脱落などがある。

7. 1. sh の添加

丹麻方言では d の直前に sh が添加することがある。その結果-di- ~-shdi「(与位格)」, -dila ~-shdila「(限界副動詞)」, -dii ~-shdii「(共同格)」, -di ~-shdi「(動詞派生接辞)」のような異形態が存在する。

限界副動詞の-dila が付く動詞には hugu-dila 180 (hugudulaa)「死ぬ」, kuri-dila 139 (kuridulaa)「まで」, nii-dila 94 (needulaa)「開ける」, ra-dila 132 (redulaa)「来る」, suu-dila 170 (saudulaa)「過ごす」, rua-dila 180 (urodulaa)「入る」, x-dila 46, xji-dila 89 (xjidulaa)「行く」, xjiligha-dila 41 (xjilghadulaa)「送る」があり-shdi が付く動詞には ghari-shdila 236 (gharidulaa)「出る」がある。ri- で終わる動詞には-dila, -shdila のいずれも付きうるが, それ以外の動詞には-dila が付く。語幹が g で終わる動詞というのは存在しないため, -dila ~-shdila のどちらが付くかを問う意味はない。

共同格 (あるいは「~を持っている」) の-dii が付く名詞には bai-dii 167 (buyedii)「体」, kol-dii 62 (koldii)「足」, laxji-dii 67 (labjidii)「葉」, nesi-dii 133 (nasidii)「年齢」, sghali-dii 194 (sghaldii)「髭」, sgili-dii 227 (sgildii)「心」があり, -shdi (i) が付く名詞には funuri-

shdi 70 (funirdu)「香り」, log-shdii 49 (logdii)「格好」, niuri-shdii 36 (niurdu)「顔」がある。ri, g で終わる語には-shdi (i) が付き, l, li, xji, si で終わる語には-dii が付く。

形容詞や名詞に付いて動詞を作る接尾辞-di ~shdi がある。具体的には shduri-di-224 (shdurdi-)「長くなる」, duri-shdi- 103(undurdi-)「高くなる」, hguari-di-gha-106(hughurdilgha-)「短くする」, namuri-di-150「秋になる」という例がある。例が少ないので詳しい異形隊の様子が分からないが, ri の直後で-shdi となることがある。

以上の三つの形態素は例が少ないため, はっきりとした傾向は分からないが, 与位格の例は多数現れるので, sh が添加される状況がはっきりする。以下にすべての例を述べる。

* は隠れた n の出現情況にバリエーションがある語である⁽⁹⁾。

正書法	新正書法	-di	-shdi
r	r	—	ger-shdi 63「家」
	ri	Nanjeri-di 31「(人名)」	duri-shdi 42「日」 duri-shdi 108「高い」 ghajari-shdi 3「土地」 ghari-shdi 43「手」 ghoori-shdi 152「二人」 ghuari-shdi 172「光」 hawari-shdi 176「鼻」 moori-shdi 48「道」 niuri-shdi 49「顔」 sari-shdi 49「時」 seeri-shdi 123「お金」 szari-shdi 35「麓」 yeri-shdi 99「夏」 yeri-shdi 142「懐」
	φ	xjuu-di 38「底」	—
ri	ri	beeri-di 194「妻」 biiri-di 71「門枠」 mori-di 107「馬」	—
r(e)	re	—	tingege-shdi「天」
l	l	ghal-di 144「火」 kol-di 145「足」* suul-di 224「終わり」	—
	li	ayili-du 130「村」 rguli-di 99「冬」 sgili-di 145「心」	ghuali-shdi 104「谷」
li	li	—	—
g	g	qog-di 42「時」 = dog-di 51「歌」 dundog-di 50「事」 hiinog-di 114「編牛」	qog-shdi 175「時」 gog-shdi 149「関所」 rog-shdi 31「方向」 rog-shdi 42「親戚」
	u	pujiu-di 198「文字」 qijiu-di 200「花」	—

正書法	新正書法	-di	-shdi
ng	ng	bulang-di 205 「隅」 giixang-di 144 「路地」 pang-di 38 「小屋」 qinsang-di 65 「家庭」	—
	n	poon-di 76 「家畜の囲い」	—
s	s	lus-di 150 「国」	—
m	n	ghadin-di 1173 「実家」	—
n	n	guan-di 110 「深い」 ken-di 114 「誰」 kun-di 88 「人」 muruun-di 31 「川」 naaxjin-di 67 「ナーシジン」 rgan-di 216 「彼」 -san-di 189 「(形動詞過去)」 snqan-di 145 「世界」 ruan-di 95 「床, 席」	—
-n	-n	-gu-n-di 51 「(形動詞未来)」* ama-n-di 49 「口」* rde-n-di 46 「門」* bai-n-di 57 「体」 hana-n-di 71 「皆」 jai-n-di 71 「甥」 kol-n-di 58 「足」* nari-n-di 175 「病気」 nesi-n-di 45 「年齢」 nudu-n-di 133 「目」* nuri-n-di 173 「背中」 pogxi-n-di 247 「徒弟」 qigi-n-di 57 「耳」 shdiga-n-di 90 「脱穀場」 suu-n-di 57 「脇の下」* tulighui-n-di 64 「頭」* xaazi-n-di 46 「平台」 xiisi-n-di 107 「小便」 zuuha-n-di 93 「竈」 ne-n-di 93 「これ」 te-n-di 111 「彼」 te-n-di 129 「あなた」	—

正書法	新正書法	-di	-shdi
V	i	-hgi-di 177 「(複数)」 -ngi-di 84 「(単数)」 manglii-di 38 「端」 -ni-di 187 「(主題)」 qirai-di 31 「岸」 tulighui-di 55 「頭」* xjii-di 77 「中心」	—
	e	aanee-di 35 「お婆さん」 ude-di 165 「門」* wunee-di 200 「乳牛」	—
	a	aama-di 175 「母」 ama-di 174 「口」* aaja-di 233 「兄」 dangmaa-di 143 「昔」 dunda-di 102 「中間」 ghada-di 207 「石山」 gura-di 111 「別」 hula-di 193 「遠い」 jigha-di 157 「上」 jeena-di 127 「自分」 qirighua-di 71 「錠前」 rgunbaa-di 220 「寺院」 ula-di 144 「山」 yiigua-di 159 「皆」	—
	u	suu-di 130 「脇の下」* = nudu-di 147 「目」* smu-di 157 「矢」 -gu-di 145 「(形動詞)」*	suu-shdi 88 「脇の下」

本来 r で終わっている語は新正書法が r で終わろうと ri で終わろうと、ほとんど -shdi が付き、稀に -di が付く。本来 ri で終わるはずの語には -di が付く。本来 l で終わる語には原則として -di が付くが、稀に -shdi が付くこともある。本来 li で終わる語がどうなるのかは与位格が付いた例が得られなかったので分からない。g で終わる語には -di, -shdi のどちらも付きうる。本来 g で終わっている語で g が u に変わって語には -di が付く。その他の子音で終わる語には -di が付く。n と -n (いわゆる隠れた n) では区別がない。母音で終わる語には -di が付く。suu 「脇の下」の隠れた n が出現しない場合にはどちらも付きうるがその理由にははっきりしない。

したがって、「r, ri, g で終わる語に d で始まる接辞が添加する場合、d の前に sh が添加することがある。そのうち r, ri で終わる場合はほぼ義務的に sh が添加する」というように一般化することができる。この現象は r が無声化していることを意味するものである。ghuashdin 149 (ghurdin) 「速い」という綴りがそのことを裏付けている。その中間的な状態を示す例が, namurishda- 191 ~ namushda- 190 (namurda-) 「腹いっぱい食べる」という自由交替に見られる。なお r は存在しないが、同一語に sh の有無の両方が存在する

qinashda 205 ~ qinada 159 (qinaada)「あさって」というバリエーションがある。marishda-52 (mashdaa-)「忘れる」は正規の正書法でも r が完全に無声化していることを示している。taashi 28 ~ taari 84 (tash, tar, dash)「石」はこの現象に過剰修正が起こったものである。

「～てしまう」という形式は動詞語幹または動詞語幹 + 分離副動詞に -dii ~ -di が接続するが、ri で終わる語幹に付く場合も d の直前に sh が付け加わることはない。kuri-di 186 (kuridii)「やって来る」、tari-dii 152 (taridii)「植える」、tiiri-d-a 209 (teeridaa)「抱く」、wari-di 170 (waridii)「取る」。したがって ri の直後の d の前に無制限に sh が添加するわけではなく、形態素による違いがある。また形態素の切れ目がない場合でも g と d の間に sh が添加されている語が『土漢詞典』の「おもがい」という語に見られる。他の資料では sh は添加されていない。『土漢詞典』nogshdoo, 『土漢詞典』nɔɡdɔː, 『土漢対照詞彙』nogdoo, Тодаева нoɣdɔ, *Dictionnaire Monguor-Français* nogdɔ。天祝方言では結合副動詞 -tcə(-ji) や仮定副動詞 -tʂa(-sa) にも ʂ が添加する例が見られるが、丹麻方言にはない⁽¹⁰⁾。

7. 2. n の添加

丹麻方言では副動詞 -sanghula, 複数形 -(n)ghula, 程度を表す -ghula の l の直前に n が添加して -sanghunla, -(n)ghunla, -ghunla となることがある。この現象は他の方言には見られないものである。最初の副動詞は正規の正書法では -san gulo と分かち書きされることが多いが、他に -san ghulo, -san gula, -san ghula, -sangula のバリエーションがある。しかし l の前に n を伴っていることはない。この形態素は東溝方言、沙塘川方言の資料には現れるが、哈拉直溝方言、那龍溝方言、天祝方言の資料には見当たらない形式である。

複数形接辞 -(n)ghula は人を表す語にのみ付く形式であり、最初の n は東溝方言では母音語幹に付くときに現れ、子音語幹に付くときは現れない。丹麻方言では母音語幹に n がない形式が付くことがある。問題になるのは l の直前に n があるか否かである。

程度を表す -ghula はすべての方言に現れる形式である。正規の正書法では分かち書きされ ghulo, gulo, gula のバリエーションがあるが l の前に n を伴っていることはない。

7. 3. n ~ m 交替

丹麻方言では程度を表す nama のバリエーションに mama がある。この現象は他の方言では見られないものである。正規の正書法では naama という形式で現れ、天祝方言で laama という形式で現れるので naama が本来の形であり、天祝方言で語頭の n が l に変化しているのに対し、丹麻方言では語頭の n が m と交替していることが分かる。丹麻方言では音節末の m が多くの場合 n に変化しているが、音節初頭の n が m に変化する例は他には見られない。後続の m による逆行同化がこの方言で起こっていると結果的には言える。nama よりも mama のほうが多く現れる。

7. 4. s ~ sz 交替

形動詞過去-san ~-szan, 仮定副動詞-sa ~-sza, 譲歩副動詞-sada ~-szada の自由交替が見られる。

7. 5. l脱落 (-gha)

丹麻方言ではlは語中で音節末に来ることはない。したがって使役形接辞-lgha は-ligha になるはずであるが、この形式が現れるのは、第二章、第三章、席元麟、白永福のごく少数に例が見られるにすぎず、残りはすべてlが脱落した-gha の形式で現れる。本来の母音語幹動詞に-lgha でなく-gha がつく現象は天祝方言にも見られるが⁽¹¹⁾、丹麻方言ではさらにこの現象が進んでいる。

8. 形態素の異形態

接辞に異形態がある場合について述べる。

8. 1. 単数

単数接辞は-ngi, -gi, -nga, -ga の4つの異形態がある。母音aを伴う形式のほうが出現頻度は低い、その現れる条件ははっきりしない。nを伴う形式は本来は母音語幹に用いられるが、丹麻方言では必ずしもそうっていない。

8. 2. 複数形式

-sgi, -nghula, -nghunla, -ghula, -ghunla: -mangi, -ma がある。-nghula, -nghunla, -ghula, -ghunla は「犬」に付いた唯一の例外を除いて人を表す語にしか付かない。この点は他の方言と同じである。-s, -ngnu 等の短縮形は現れない⁽¹²⁾。

8. 3. 属格・対格

属格・対格の異形態は-ni と-nii があり、後に-ni が付くときは必ず-nii の形式になる⁽¹³⁾。ただし2例だけ席元麟のテキストに-ni を伴わない-nii が現れる。属格・対格の母音が長母音化する現象は東溝方言にも存在するが、哈拉直溝方言、沙塘川方言、天祝方言には存在しない。

8. 4. 位格

位格の異形態は-ra, -ri, -r がある。前者2つは自由交替である。-r は後に-ni 「(主題)」, -sa 「(奪格)」, -ji 「(方向)」, -na 「(再帰)」, -gu 「の」等が付くときに現れる-ra の自由交替形である。以上の形態素が-ri の後に付くことはない。r の後の母音が消えるバリエーションを持つ方言は他にない。

8. 5. 共同格

-(sh)di, -(sh)dii があり自由交替である。

8. 6. 分離副動詞

分離副動詞の異形態には, -a, -ani, -ni, -eeni, -eni, -wa, -wani があり, -eeni を除いて長母音はない。-eeni は kil-eeeni 232 (kileenu) 「言う」, -eni は hgil-eni 142 (hgileenu) 「求める」に現れ, これらが唯一の母音交替形である。w を伴う形式は東溝方言では, 長母音または重母音語幹にのみ付くが, 丹麻方言では本来の短母音で終わる語にも付く。

本来の短母音 a, e, i で終わる語に母音で始まる方の異形態が付く場合は語幹末の母音が脱落するが, 本来短母音の u で終わる語の場合は awu-a → aw-a 155 (awaa) 「取る」, uqu-a → uqu-a 41 (uqaa) 「飲む」のように語幹末の母音が脱落する場合としない場合がある。語幹末が a の場合-a が付いているのかゼロ副動詞 (= 語幹だけの副動詞) なのかの識別が事実上不可能である。-ni は murigu-ni 244 (murguanu) 「頭を下げる」, ghua-ni 181 (ughoonu) 「与える」に現れる。前者は murigu+ani の誤植, 後者は ghua+ani の縮約形かもしれない。

8. 7. 主観範疇

主観範疇はほとんどが ii, yii であるが, 伊興連と Zhunmaa にのみ wai も現れる。ii と wai のどちらの形式を用いるかによって土族語互助方言の下位方言を分類することができる。東溝方言, 東山方言, 那龍溝方言は wai を用いる方言であり, 紅崖子溝方言, 哈拉直溝方言, 沙糖川方言, 天祝方言は ii を用いる方言である。丹麻方言ももっぱら ii を用いる方言に分類することができる。第4節で述べた母音の上昇, 特に ai から ii の方向への上昇がある方言は主観範疇の ii を用いる方言である。

8. 8. 客観範疇

客観範疇の形式には -a, -wa, -na という異形態があるが, このうちの -na と -wa は n または ng で終わる語に付く。どちらが付くかにバリエーションがある点は正規の正書法と同じである⁽¹⁴⁾。

8. 9. -ya の省略

動詞語幹に付く意志形 -ya が省略可能であることは, 陳乃雄編著, 清格爾泰校閲 (1987: 199) に保安語, 土族語民和方言について言及されているが, 土族語互助方言についても当てはまる。丹麻方言では yiu- (yau-) 「行く」の意志形はすべて -ya が省略されている。しかし他の動詞の -ya は省略できない⁽¹⁵⁾。

8. 10. ゼロ副動詞

動詞語幹だけで副動詞的に使用されるゼロ副動詞は河湟語には珍しくない形式であり, 土族語互助方言にも頻繁に現れる形式である。丹麻方言でも so- (sau-) 「～ている」, ghua-

(ughu-)「～てやる」, gii- (gee-)「～ておく」, ra- (re-)「～てくる」, xji- (xji-)「～ていく」, yiu- (yau-)「～ていく」, bo- (bau-)「～て降りる」, ghari- (ghari)「～で出る, 登る」等の表現に伴う動詞にゼロ副動詞が現れる。ただし結合副動詞 -ji を伴っている形式も yiu- (yau-)「～ていく」以外には現れる。shda- (shda-)「できる」, ada- (ada-)「できない」はゼロ副動詞の方が普通であるが, 丹麻方言では非分離副動詞 -n を伴っている形式が出現する。この形式は互助方言の他の方言では見られないものである。

8. 11. 否定辞 lii ～ yii

動詞に前置する否定辞 lii は互助方言に共通の形態素であるが, これ以外に yii が席元麟, 哈全德, Zhunmaa, Loya にのみ現れる。那龍溝方言には li 以外に i という形式が記録されており, 『土漢対象詞彙』, 『土族語詞彙』にも ii が記述されているが, 哈拉直溝方言, 沙塘川方言, 天祝方言には見当たらない形式である。

過去形と共起する sii は丹麻方言には存在しない。他の方言では lii が過去形と共起する例が稀に存在するが, 丹麻方言では過去形と共起する lii ～ yii は存在しない。したがって過去形と共起する否定の形式は -gui, -gua のみである。

9. -ni / -nii の識別

動詞語幹に付く終止形としての -ni と -nii は自由交替ではなく, 動詞によって使い分けがある。-ni について記述しているのは照那斯圖 (1981:35-36) のみである⁽¹⁶⁾。しかし東溝方言の資料を吟味すると, -ni と -nii は整然と区別されている。丹麻方言における区別も基本的には同じものである。この区別は哈拉直溝方言, 沙塘川方言, 天祝方言には存在しない。

丹麻方言の -ni は ada- (ada-)「できない」, durla- (durla-)「好む」, mude- (mude-)「知る」, handiladi- (hamduladi-)「いっしょになる」, jiila-「嫌う」, kile- (kile)「言う」, nogxji- (nogxji-)「(心から) 過ぎる」, shda- (shda-)「できる」, sga- (sge-)「見える」, sushidudi- (sogdoo-)「酔う」, tanni- (tani-)「知る」, xrai- (xjuree-)「信じる」に付いた例がある。以上のうちで kile (kile-)「言う」以外は人が関与する非自制的な述語である。一方 -nii は自制的な述語あるいは人が関与しない述語に付いている。丹麻方言の資料には自制的述語の否定の例が見当たらないが, 述語が否定されると -ni が付くのが普通である。

10. 丹麻方言固有の特徴

丹麻方言にしか見られない次のような特徴がある。

10. 1. 形動詞未来主観範疇

-gui, -gii があり自由交替である。ただし ui ～ ii という母音の自由交替は他には見られない。土族語の他の資料には -gii の形式は現れない。

10. 2. -ja gua

土族語互助方言の動詞の否定で gui, gua を後置する場合、動詞は -n または -ji の形式になる。前者が大まかに非過去、後者が過去を表す。-n と -ji が副動詞か終止形かの判断が難しいがそのどちらであっても、後に主観範疇(-ii)／客観範疇(-a)を表す形態素は付いていない。文全体の evidentiality (確認性)を表す判断語気詞は gu の後に付く i (主観範疇)か a (客観範疇)である。ところが丹麻方言には動詞語幹が -ja のことがある。-ja の a が客観範疇を表しているとする、一つの文に判断語気詞が二つ存在することになってしまい都合が悪い。しかし -ja を -ji の自由交替と考える根拠は全くないわけではない。動詞語幹末で i と a が交替する例が存在するし、単数 -(n)gi ~ -(n)ga, 位格 -ri ~ -ra の例がある。述語の自制性の面では、わずかに -ji gui/gua のほうが -ja gui/gua よりも自制性が強い傾向は感じられる。

10. 2. te (二人称) と te (三人称)

丹麻方言では音韻変化の結果、二人称と三人称が形式上の識別があいまいになっている。丹麻方言では二人称には ta と te が現れ、三人称には te が現れる。実際に得られた結果を見ると、二人称 ta は単独または複数接辞 -nghula が付くときに現れ、te は複数接辞 -hgi/-sgi や助詞 -ha が付くとき及び ghula の前に現れる。一方、三人称の te は複数接辞 -nghula が付くとき、及び直接格接辞が付くときに現れる。

11. まとめ

以上述べた丹麻方言の特徴を他の東溝、東山、紅崖子溝、哈拉直溝、沙塘川、那龍溝、天祝の諸方言と比較してみよう。東溝、東山、紅崖子溝の諸方言の特徴は清格爾泰編著、李克郁校閲 (1991: 369-396) のデータを分析したものであり、哈拉直溝方言は Тодаева (1973) に記録されている言語、沙塘川方言は Heissig (1980), Schröder (1959, 1970), 那龍溝方言は de Smedt et Mostaert (1964), 天祝方言は甘肅省《格薩爾》工作領導小办公室、西北民族学院《格薩爾》研究所編 (1996) の言語を分析したものである。

		東溝	東山	紅崖子溝	哈拉直溝	沙塘川	丹麻	那龍溝	天祝
音韻	1 #NC の回避傾向		○				○		
	2 b,d,g → ʔ, ɸ / __ \$		○				△		△
	3 wai = ii			○	○	○	○	△	○
	au = uu, ai = ee			○	○	○	○		○
	4 母音の広い変種			○			○		○
	5 iu → u / l,d,n __	○		○	○	○			○
	6 jese 「草」			○		○	○		○
	7 語頭短母音回避			○		○	○		○
	8 i, u → r [ɹ]			○			○		○

		東溝	東山	紅崖子溝	哈拉直溝	沙塘川	丹麻	那龍溝	天祝
音韻	9 #rC の回避傾向					○			
	10 aŋのみ (oŋなし)						○		○
	11 l → r / __ \$							○	
	12 造格, 目的副動詞 -ra							○	
	13 -san, -sa [dz]					○	○	○	○
	14 ie	○	○	○	○	○		○	○
	15 uo, ua	○	○	○	○	○	○	○	○
	16 sV V ≠ i					○		○	
	17 *i > ɤ	○	○	○					○
	18 sh[s] の挿入						○		○
	19 n の添加						○		
	20 nama ~ mama						○		
	21 n の挿入								○
	22 r, l の開音節化						○		
	23 短母音語幹 +wa (ni)						○		○
	24 -ni ≠ -nii	○					○		
	25 否定 (y)ii あり						○	○	
	26 複数形短縮形	○			○	○		○	○
	27 -saar (継続副動詞)	○							
	28 -san gulo					○	○		

註

- (1) 「烏」は正規の正書法でも xau, xuu のバリエーションを認めている。
- (2) 角道 (2002) を参照のこと。
- (3) 清格爾泰等編 (1988: 80-111) には席元麟が語った「土族民間文学概況」が IPA で記されている。この中に現れる複数形は -sg³ の形式でのみ現れ、形容詞等の程度を強調する形式は na:ma の形式でのみ現れる。一方 Limusishiden & Kevin Stuart (1998: 144-150, 173-180) の席元麟が担当した部分には複数形は -hgi の形式でのみ現れ、形容詞等を強調する形式は -nama, -mama の両方の形式で現れる。この事実からだけでも、Limusishiden & Kevin Stuart (1998) に改竄の跡が窺われる。
- (4) 鼻音の有無によるバリエーションは、角道 (1988: 43), 角道 (1990: 84), 角道 (1997: 47) を参照のこと。
- (5) 天祝方言については (角道 (1997: 47-48)) を参照のこと。また「門」と「食べる」に関しては紅崖子溝方言 (清格爾泰編著, 李克郁校閲 (1991: 370)) も類似した現象を示している。
- (6) 正規の正書法でも子音語幹に -nge が付いていることが稀に現れるがある特定のテキストに集中している。母音語幹に -ge が付いている例はさらに稀であるが、1 例だけ確認できた。詳細は角道 (2002: 85) を参照のこと。
- (7) 紅崖子溝方言のこの特徴は清格爾泰編著, 李克郁校閲 (1991: 369-396) を検討することで分かる。哈拉直溝方言については角道 (1988b) を参照のこと。
- (8) 天祝方言では第一音節には 1 例の例外を除いて, a,i が現れず aa, jii のみが現れる。詳細は角道 (1997: 35) を参照のこと。
- (9) 隠れた n がどの語に現れるかに関しては、角道 (2002b) を参照のこと。

- (10) 詳細は角道 (1997: 50-51) を参照のこと。また類似した現象は保安語, 康家語にも観察される。陳乃雄等編 (1986a), 孫玄開主編, 斯欽朝克圖著 (1999) を参照のこと。
- (11) 天祝の使役形に関しては角道 (1997: 51) を参照のこと。
- (12) 複数形のうちのいわゆる短縮形 -s は単独では稀にしか現れないが, 斜格では Heissig (1980) の沙糖川方言には頻繁に現れる。代名詞では -ngu が Топаева (1973) の哈拉直溝方言, Heissig (1980) の沙糖川方言, 甘肅省《格薩爾》工作領導小辦公室, 西北民族學院《格薩爾》研究所編 (1996) の天祝方言に現れ, 天祝方言ではさらに -ngla が 1 人称に現れる。de Smedt et Mostaert (1933: 12-13, 35-41) によると, 那龍溝方言では与位格, 奪格の前には -s が現れる。
- (13) 照那斯圖編著 (1981: 22) には属格・対格の -nə (-nu) の ə は三人称領属附加成分 -nə (ni) の前で長くなり ii (ii) になると述べているが, 三人称領属附加成分がなくても長母音になることがある。清格爾泰等編 (1988: 172-204) の範圍(「黒馬」)に限っても, -ni:nə は 2 例しかないのに対し, -ni: は 10 例ある。
- (14) 正規の正書法における -wa, -na のバリエーションに関しては, 角道 (2002a: 79-80) を参照のこと。
- (15) yau-「行く」の意志形 -ya はどの方言でもよく省略されている。甘肅省《格薩爾》工作領導小辦公室, 西北民族學院《格薩爾》研究所編 (1996) の天祝方言の資料では, -ya が付いているのが 10 例, 省略されているのが 6 例確認できた。丹麻方言では yiu- (yau-)「行く」のすべての -ya が省略されている。Schröder (1959: 110, 262 行) の mand- (manta-)「掘る」の例が 1 例ある以外は, どの方言にも「行く」以外の動詞の -ya が省略された例はない。「行く」でも xji- の場合は -ya は省略されない。
- (16) 清格爾泰 (1991: 225) には m ~ n 交替として次の例が挙げられている。
 bu:li:mudem.
 bu:li:muden(ə).
 この例文の二つ目の形式が -ni に相当するものである。説明では -m と -ni が互換可能であるように見えるが, 実はそうではない。

参考文献

- 角道正佳 (1988a) 「土族語の下位方言」『大阪外国語大学學報』第 75. 1-2 号 49-63
- 角道正佳 (1988b) 「Geser rēdzia-wu (土族語の下位方言) の言語 - 自由交替 -」『大阪外国語大学學報』第 76. 1-2 号 25-50
- 角道正佳 (1990a) 「土族語 (モンゴル語) の一方言の自由交替 - Aus der Volksdichtung der Monguor の言語 -」『大阪外国語大学論集』第 3 号 65-91
- 角道正佳 (1990b) 「土族語の正書法」『大阪外国語大学論集』第 4 号 49-76
- 角道正佳 (1997) 「天祝土族語の特徴『格薩爾文庫』第三卷の資料に基づいて」『大阪外国語大学論集』第 17 号 33-61
- 角道正佳 (2002a) 「土族語の正書法のバリエーション」『大阪外国語大学論集』第 26 号 69-96
- 角道正佳 (2002b) 「土族語の語幹末添加音 n」『日本モンゴル学会紀要』第 32 号 29-39
- 陳乃雄等編 (1986) 『保安語和蒙古語』(Bao an kele ba mongyol kele) 蒙古語族語言方言研究叢書 010 内蒙古人民出版社
- 哈斯巴特爾等編 (1986) 『土族語詞彙』(Mongyor kelen ü uges) 蒙古語族語言方言研究叢書 014 内蒙古人民出版社
- 互助土族自治縣民族語文辦公室翻印 (1982) 『土漢對照詞彙』(Mongghol Qidar Harilqilegu Ugosge) 互助土族自治縣
- 甘肅省《格薩爾》工作領導小辦公室, 西北民族學院《格薩爾》研究所編 (1996) 『格薩爾文庫』第三卷 甘肅民族出版社
- 李克都主監 (1988) 『土漢詞典』(Mongghul Qidar Merlong) 青海民族出版社 西寧

- 清格爾泰等編 (1988)『土族語話語材料』(*Mongyor kelen ü üge kelege yin material*) 蒙古語族語言方言研究叢書 015 內蒙古人民出版社
- 清格爾泰編著, 李克郁校閱 (1991)『土族語和蒙古語』(*Mongyor kele ba mongyol kele*) 蒙古語族語言方言研究叢書 013 內蒙古人民出版社
- 孫玄開主編, 斯欽朝克圖著 (1999)『康家語』中國新發現語言研究叢書 上海遠東出版社
- 席元麟 (1985)「土族語音位系統」中國民族語言學會編『中國民族語言論文集』395-405
- 照那斯圖編著 (1981)『土族語簡誌』中國少數民族語言簡誌叢書 民族出版社
- Heissig, Walther (1980) *Göser rëdzia-wu, Dominik Schröders nachgelassene Monguor (Tujen)-Version des Geser Epos aus Amdo*, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Limusishiden & Kevin Stuart (1998) *Huzhu Monghul Folklore, Text & Translations*, Languages of the World/Text Library 03, LINCOM EUROPA.
- de Smedt, A. et A. Mostaert (1964) Le dialect monguor parlé par les mongols du Kansou occidental II^e partie *Grammaire*, Mouton & Co., The Hague.
- de Smedt, A. et A. Mostaert (1933) Le dialect monguor parlé par les mongols du Kansou occidental III^e partie *Dictionnaire Monguor-Français*, Imprimerie de l'université Catholique, Pei-p'ing.
- Schröder, Dominik (1959) *Aus der Volkdichtung der Monguor*, 1 Teil, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Schröder, Dominik (1970) *Aus der Volkdichtung der Monguor*, 2 Teil, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Suhunbiin (蘇紅秉) huralji turuulasanni [collector] (1988) Nanjeer, *Chileb*. 3, pp. 3-9.
- Тодаева, Б. Х. (1973) *Монгорский язык*, Издательство «Наука» Главная редакция восточной литературы, Москва.

(2005. 1. 14 受理)